

京鹿子



昭和二十三年九月二十三日第三回印刷
平成十八年十一月二十一日
編集人 山田 正太郎
印刷人 山田 正太郎

12月号

山眠る
丸山佳子

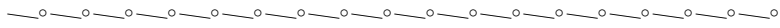


秋高し 亀ひろひ来て 小忙しき

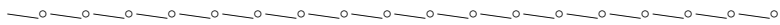
腑におちぬところに 煙入り 彼岸

お先にと 三羽とびゆく 彼岸鳩

蜻蛉には 任重すぎる 紅の橋



世の中がまた変はる秋雨の川よ
木の実坂山彦君はいまどこに
日の丸の円より赤い実箒目に
蓮実とぶわたしに今日あり明日がある
百日をまじめ一と筋柳散る
耳ざはり良い数珠の音ねに山眠る



豊 田 都 峰

清響集 その六十八

みづうみに降りたつよりの天高し

露寒き故山は墓碑を残すのみ

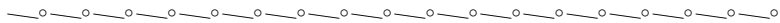
露寒の野は早々と星かかぐ

荻むらの高なびきして膳所城址

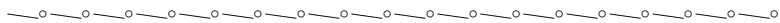
小野豆匂碑二句

秋光を彫み合はせて句碑座る





秋高し句碑また高き座を得たり
丘の上の一草として月に侍す
月あげて影ひくもののほそかりき
葛を掘る山のひびきに触れもして
鮎落つる川ひとすぢに夕映えて
鮎下り日々に里山透けはじむ
ほほづきを鳴らせば雲よりとほき音に
秋蝶のかげたちまちにさらはるる



秀華採集

花水地下街は藻の匂ひ

矢野 千佳子

定型感覚を崩さずに、「地下街は」が短いのは「藻の匂ひ」に直接的につなぐためと感じた。一番表現したかったものが表現できた。それにしても地下都市の臭いをうまく把握している。

看取る夜の月への梯子はづしおく

井上 菜摘子

架線夫のポケット七つ雲の峰

宮田 千優

前句は、月を仰ぐ気持を自分からあきらめる心象であり、後句は、架線夫の仕事場を具体的に指摘して暗示している。

鈴鹿 仁

二卵性

柿熟れてこれから先の二卵性
裏木戸に噂の根あり石路の花
世馴れしはおとこの甲斐性鷹渡る
猫の手も借りずひと日を暮の秋

系露忌三句

色鳥の彩を画けば野の動き
山粧ふ法の一字を探しゆく
忽然と余白のままに露の声

近 詠

宇都宮滴水

寒 猿

貧相の相見たがひや寒の猿
産声をたしかむ炉火の明るさに
茅葺き家雪をふやして居直りぬ
恃み過ぐ老樹の丈に通草熟る
くに訛暮秋の山を越えてより
肩書の消ゆ川となり雲凍つる
数寄屋下駄ころがる音に春が来る

神麓集



小春日や聖武天皇遺愛せる
 暮れ早し光明皇后大仏に
 紫檀貼り優美な碁盤歳惜しむ
 染め象牙撥鏤はちりの技法冬うらら
 白と黒紅と紺とて年暮るる

林 日圓

親王誕生 北村 香朗
 天子授り皇子もたらせしこうのり鶴
 さやけしや皇子誕生に湧く列島
 爽やかや生涯トツプニユースたり
 新涼や 日本列島 総笑顔

水 葉 丸山 冬鳳
 搔き氷り水菓の色に清澄色
 御自由に麦茶はいかが冷茶ケアー
 残暑いま無灯の提灯縦縞よ
 かなかなや薄暮の里山陽が滑べる
 谷出水早やも三日目鱒澄める

秋の茄子 藤岡 紫水
 燕去ぬ降りぐせつづく空残し
 悼む文書けば鳴き出す夜のちろ
 秋茄子も空も濃き日や人恋し
 ささやかなゆとり蓑虫貌出せり
 鶏頭の影まで染めて大没日

大賀蓮二段畑の花の直指
 古代蓮祈りのごとく蕾みけり
 フランテンとは中国の蓮花太し
 姫蓮の花あざやかに古代恋ふ
 醉妃蓮浄台蓮と咲き誇る

菊 月 丸井 巴水
 大文字消ゆ遠景は羅紗の闇
 白煙を野の秋蝶へ容疑かけ
 息継ぎの菊月石塀小路抜け
 紅萩の喝采神へ近づけり
 蟋蟀のふと止む闇の北枕

神麓集



夏逝かず橋の袂に小魚見て
日記に余白秋とんぼ風に浮く
送電線追ひ稔り田の里を得る
湖晩夏別かれの影を記憶する
澄む水を空に続ける湖北あり

松本 鷹根

秋日傘

森津 三郎

海の日の逆らふ雨に旅続く
梅雨晴れの鴉は杜に鳴き交す
東漸の黒雲明日は梅雨あけか
茶毘の庭なほ去り難き秋あきつ
黒多き秋の日傘の同窓会

神威岬

川崎 光一郎

心不全予後の試行や秋の旅
札幌晴旭川雨竜田姫
シリパライン虎杖の花飾りかな
透きとほる積丹ブルー秋麗ら
風すさぶ神威岬や秋の声

無の一字 竹貫 示虹
ガラス窓拭けば覗きにくる冬蝶
落日へスワン翔けんとして止みぬ
枯葉ふり拂ふ身ぶるひ大樫
床軸を無の一字とす年のくれ
裸木のむんずとつかむ虚空かな

かへらじも

北川 孝子

かへらじのかの日の刻風鎮め
胡弓に恋つのおわらの盆囃子
いく山のこぞりてやさし風の盆
捨て上手子に学びつつ夏果つる
病まず来しことが身上夏深む

高橋 千美

漬鮎の塩切るころや朝曇
漁りを生業として盆支度
青芒雨来るまへの風匂ふ
月見草とつぷり暮れし竹生島
行く夏の木の根にからむ木の根かな



京鹿子集

豊田都峰選

風死すやトルソーの背は鋭敏に

昼銀河漂ひ坐る石の椅子

そはそはと緑陰ふかく夏の蝶

夢の端ぼとんと落ちた雨蛙

花水地下街は藻の匂ひ

看取る夜の月への梯子はづしおく

浮いてこい浦島太郎にはさせぬ

逝く人と息ずれてゆく梅雨暁

たれよりも足元ぬらし墓洗ふ

昼顔にずぶぬれの跡なかりけり

横浜 矢野千佳子

亀岡 井上菜摘子

架線夫にポケット七つ雲の峰

読み終へて日付変りぬ夏の月

書き直し又反古増やす夜の秋

芙蓉咲くまだ宿題の残る子に

夏芝居死者よみがへる回り舞台

鋸山より一挽きの騒雨かな

房総の突端に在り終戦忌

目瞑りて一刻過ぐす終戦日

高射砲陣地の跡の高き天

秋蝶の一途と謂はむ羽使ひ

豊中 宮田 千優

千葉 河内 桜人